

若越郷土研究

405

忠直伝説考

杉原 丈夫

説話と史実

忠直の行状は菊池寛の「忠直卿行状記」をもつて一般に知られるようになった。しかしあれは小説であつて史実そのものではないことは、誰もがよく承知していることである。「越陽秘録」とか「忠直卿御乱行之事」などという口碑野史の類についても同じことが言えよう。従来の忠直研究の欠陥は、文学的説話と史実とを混同し、両者はつきり区別しなかつたことにある。

忠直説話が文学上の創作であつて史実でないことを二三の事例によつて例証してみよう。先ず「越陽秘録」は忠直が初花の茶入を授けて二つにこわす話から始まる。し

かし津山藩「御家譜」によると、松平光長に失政があつて元禄十一年彼は隠居となり、その子長矩が越後国高田二十五万石から美作国津山十萬石に左遷されたとき、廃絶にならなかつたお礼として、その年の十二月六日問題の初花の茶入を將軍家に献上している。忠直が腹立ちまぎれに茶入をたたき割る方が物語としては面白いが、残念ながら史実ではない。

「越陽秘録」は茶入の話に続いて、小山田多門が出世する段が述べてある。しかし福井藩の給帳を見ると、多門は秀康の時に既に七百石の本身であり、忠直のときも七百石である。忠直時代に急に小身から身を起したのではない。

「忠直卿御乱行之事」は一層物語的であつて、美しい女の絵姿が一陣の風にもなつて忠直の所へ吹いてくることから話が始まつている。この絵姿の美女を求めて得たのが一国女である。ところがこのような説話は絵姿女房と称するものであつて、日本の各地に類似した話がある。忠直の配流先豊後国にも同じ伝説があり、ここでも忠直は絵姿の女房を求めて府内の町でおらんという愛妾を得ている。忠直の所へ二度も美

人の絵が飛んできたことを史実と考える人は誰もいないだろう。つまりこの話は初めから興味本位の物語として語られているのであつて、語る方も聞く方もそれが史実であるか否かを問題にしていないのである。

(註) 絵姿女房と忠直伝説の関係は次の論文にやや詳しく論じてある。

杉原丈夫「絵姿女房と忠直」(文協四号) 昭和二十八年。

忠直説話の成立

一

現在我々が知つている忠直説話には少くとも四つの異なつた系統がある。

一 「越陽秘録」系統

二 「忠直卿御乱行之事」系統

三 東光寺系統の伝説

四 一乗寺系統の伝説

このほか系統が判然としない断片的説話が少しある。これについては後述する。

第一系統の「越陽秘録」は「国事叢記」巻二に掲載されている。忠直説話の中では一番まとまつていてかつ内容が複雑である。この系統の説話の特徴的内容は、初花の茶入を割ること、多門が出世すること、水谷久兵衛が逐電すること、一国女を直基

に預けること、一國女を高田様から奪うこと、生首の饗応のこと、永見右衛門成敗のこと、山川猪之助密使のこと、高田様軼封を拒否することなどである。

第一系統に属する他の書は「続片聾記」巻八の「名君言動録」である。これには「越陽祕録」という名は挙げてないが、ほとんど同文のものが引用してある。ただ高田様軼封拒否の項が欠けているだけである。

このほか一行だけ「越陽祕録」と異なる箇所がある。それは一國女を関ヶ原の間屋の娘としている点で、「越陽祕録」では出生を知らずと書いてあるから、「続片聾記」の著者が第二系統の「忠直御乱行之事」によつて加筆したのであろう。

第二系統の「忠直御乱行之事」は「続片聾記」巻二に掲載されていて、説話性をもつとも濃厚なものである。この系統の特色は絵姿女房を説くこと、残虐な行爲を詳しく描写していること、梶茂左衛門が登場することである。第一系統の説話とは明らかに内容を異にしている。

越前及び豊後地方の民話も第二系統に属するものと考えてよい。民話は口頭で伝承されてきたものであるから、文字として記

録されたのは比較的新しい。「福井地方の昔話」(南越民俗二号)及び「豊後伝説集」などに収載されている。福井の民話は絵姿女房のこと、はらみ女を殺して笑うこと、袖なしの起原を説いている。豊後の方も絵姿女房を説くことは同じであるが、はらみ女でなく、生首を膳に供えることになつており、女性の名も一國女でなく「おらん」である。

第三系統は東光寺を中心とする伝説である。はらみ女を殺した場所が東光寺の敷地になつていたりとか、その時の土蔵が今もあるとか、そのほか東光寺に現存する遺跡遺物と結び付けて語られている。文字に記録されたものとしては「片聾記」「続片聾記」「越藩史略」などの諸書に出ている。新しいものでは森恒救氏の「福井城の今昔」(福井新聞、大正二年)に詳しく記してある。

第四系統は一乗寺にある一國女の墓に結びつけて語られている。一國女が暗殺され一乗寺の門前に捨てられることが伝説の中心である。「越藩史略」にも「続片聾記」にも出ている。

以上のほか諸書に散在している断片的物語がある。いずれも史実であるのか説話で

あるのかはつきりしない。主要なものを挙げれば、先ず「片聾記」には永見成敗がある。これは「続片聾記」にも「国事叢記」にも転載されている。この話は「越陽祕録」の永見成敗とは異なり、忠直が二階から見物している所へ大筒をぶちこむことが特色をなしている。次に「続片聾記」と「国事叢記」に共通な話は、勝姫が江戸へ脱出すること、忠直配流のとき勝姫が同行しないことである。特に江戸へ脱出の話は史実としては信じ難い。「国事叢記」にのみある話は、長谷川縫殿助が自殺すること、妾を直基に預けること、関ヶ原滞留の際一國女を長谷川筑後に預けることから事件が生じ、家老が苦慮すること、山川猪之助密使のこと、配流の途中女中を殺すことなどである。このうち直基に妾を預けることや山川猪之助のことは「越陽祕録」と大体一致する。また「越雄記」「南越雑話」「越藩史略」には小山田多門の功績の話がある。これは「越陽祕録」のそれとは異なる。

二

しからばこれらの物語はいつごろいかにして成立したものであろうか。先ず諸書の作成年代を表示しておこう。

「藩翰譜」 元祿十四年（一七〇一）
 「片聾記」 元文 二年（一七三七）
 「南越雑話」 寛延 元年（一七四八）
 「越藩史略」 安永 十年（一七八一）
 「国事叢記」 弘化 三年（一八四七）
 「続片聾記」 卷一より
 卷七まで
 弘化 四年（一八四八）
 「続片聾記」 卷 安政五年（一八五八）

四つの系統の説話のうち成立がもつとも古いのは東光寺伝説である。これは既に「片聾記」にある。しかしそれはまだ単純なもので、昔はらみ女を殺した屋敷跡が現在の東光寺であるという程度のものにすぎない。「越藩史略」になると、そのときの蔵や曰が今もあるという風に発展し、「続片聾記」ではそのときのまな板まで出現する。大正時代の「福井城の今昔」に至っては、更に潤色が加わり、池の中から黒い髪の毛が出るという。時代とともに尾端が付いていく様子がわかる。

一乗寺伝説については「片聾記」は全然触れていない。後に考証するごとく、一国女は殺されていないのであるから、昔は一国女の墓はなかつたはずである。しかるに

「越藩史略」では一国女が暗殺され、一乗寺に葬られている。「片聾記」から「越藩史略」までの間に一乗寺伝説が成立し、一国女の墓と称するものが出来上つたのであろう。

第一系統の「越陽秘録」は「国事叢記」に転載されているが、その内容上の特色をなすいくつかの話のうち、どの一つも「片聾記」にも「越藩史略」にもでていない。従つてこれは「越藩史略」以後の成立と推定してよいのではなからうか。

第二系統の「忠直卿御乱行之事」は「続片聾記」のみに記載されていて、その内容的特色をなす事項は、他の諸書に全然ない。これもやはり「越藩史略」以後の成立と見なしうる。ただし絵姿女房の説話が、越前にも豊後にもある所を見ると、民話はどうも少し古くから存在し、これを原型として「忠直卿御乱行之事」が書かれたものである。

四系統以外の物語では、永見成敗の話は既に「藩翰譜」にある。おそらくこれは史実に近いものであろう。しかるに「片聾記」ではこれが発展して、忠直に向つて大砲を打つという大げさな話になつてゐる。「

越陽秘録」においては、それが更にまとまつた話となる。このほか小山田多門の話も古く、「南越雑話」に彼の三つの功績が述べてある。「越藩史略」も同じ内容のことを伝えているが、ここでは多門は佞臣としてあつかわれる。「越陽秘録」では彼の功績がもつと物語的になり、佞臣ぶりも強化される。これによつて小山田多門が悪役として脚色された時期がほぼ推定できる。

三

次の問題はこれらの物語の作者が誰かということである。これは残念ながら想像の域を出ない。このうち東光寺伝説と一乗寺伝説はそれぞれの寺院の僧侶が説話伝播に主要な役割を果したであろうことは容易に推測できよう。さしずめ観光宣伝のようなものであつたのである。

絵姿女房の説話を忠直に結びつけた作者については、これが福井秋葉神社の馬鹿ばやし連中ではないかという仮説を私は上掲の「絵姿女房と忠直」の中で提示しておいた。秋葉神社では笑わない一国女を笑わしたのが馬鹿ばやしの起原であると説明している。これは出羽国黒川能の起原が絵姿女

房を笑わしたことにあると語られているの
に軌を一にする。それに秋葉神社は小山田
多門の屋敷の近くにあつて、地理的關係も
自然である。

こうした民話を原型として「忠直卿御乱
行之事」が書き上げられたのであろう。も
ちろん作者は不明であるが、一つの手がかり
は、この物語の中に泉茂左衛門という三
百石の武士が登場し、忠直の残虐を直接体
験することになつており、また物語の末尾
に、忠直の小姓をして後に三百石で忠
昌に仕えた早崎善左衛門の目撃したことを
記録したのだと書いてある。しかるに忠直
時代の給帳にも忠昌時代の給帳にもこの二
人の名はない。おそらく仮空の人物であら
う。ところが「越有雑話」に次のような一
文がある。更に「南越見聞雑記」にもほぼ
同文のものがある。

「越有雑話」

私に云。此交合雑記は何人の著述にや
不知。越前の浪人の書たるものと見へ、
御家の事を白地にくわしく記したり。又
泉茂左衛門の近隣に住し者 後は江戸雑
町の天神の隣にも住し者記たりとも云。
つまり「交合雑記」という書物の著者は泉

茂左衛門の近所の人だというわけである。
自分の名を直接には名乗らず、泉茂左衛門
とか早崎善左衛門とかいう仮空の名に托し
ている人が「忠直卿御乱行之事」の作者で
あろう。

「越陽秘録」の方は物語の内容が複雑で
あり、藩の歴史についてかなりの知識を有
していなければ書けない性質のものであ
る。単に民間説話を潤色した程度のもの
はない。従つてこの物語の作者は福井藩の
学問ある士と推定したい。

一 国女のこと

一 国女の本名を述べているのは第一系統
の説話のみである。それによれば彼女の名
を「おむこ」という。

「越陽秘録」

茲に御寵妾の中に御智殿とてありけ
り。誠に天性の美質並者なく、其髪飽ま
で長くして一丈余、深黒にして漆の如
く、忠直公甚是を愛せられて、一国にも
かへじと宣しより、世是を一国御前とは
云けり。

「名君言動録」 続片鱗記卷八

爰に御寵愛の女中の中におむこ殿と
て有、誠に天性の美質並ぶ者なし。其髪
一丈余、黒ふして漆のごとく、忠直公甚
是を愛せらる。一国にも替じと宣ふよ
り、是を一国御前といひけり。

(註) 県立図書館刊行活字本「続片鱗記」に
「おむこ」とあるは「おむこ」の誤読であ
る。

しかし「おむこ」というのは仮空の名でな
く、実名であつたようである。実名では「お
むこ」または「小むこ」と称せられている。

「国事叢記」

伝曰中略於平古と云婦女甚美なり。小山
田多門に被仰付、長谷川筑後守に御預被
置候を、多門筑後に右美女を可渡と云。
長谷川不渡。下略

「越藩史略」

多門、忠深房、月岡養以、林求馬、真
砂大学、荻野市右衛門、及一國女小牟久
女等と日夜公の側に侍して之を惑乱す。

(註) 活字本は一國女と小牟久女の間句点
をいれてあるが、これは誤読である。県立
図書館本に従い、句点を打たない。

「津守入道一伯公御記録」 豊後国淨
土寺記録

御妾の御女中衆。おらんどこの御事は

越前家御家老久世但馬守室也。小むくどのの御事は越前の国の人也。おいとどのの御事は京都糸屋の娘也。略下。
 「御家譜」

三月廿七日 慶安 松千代、熊千代、勘子、豊後国乙津村より乗船。四月五日大坂着。同八日大坂を発し、同廿一日越州に帰る。小むく、小糸、其外女中従之。
 「国事叢記」

松千代丸、熊千代丸、於寒姫、御妾小むく、於糸、右五人大分郡乙津村より船にて越後国御登被遊。

もつとも「おむこ」と「小むく」とは別人であると解釈し、「越藩史略」の「一國女小牟久女」を二人の名と考えることもできるが、そうすると似たような名で似たようなことをした人が二人いることになり、話の筋が少々無理になる。これは大屋由良之助と大石内蔵助の関係と同じで、「おむこ」は説話上の名、「小むく」は実在人物の名と考えるべきであろう。

二

物語の上の一國女が実在人物の小むくであるとすれば、小むくはいかなる人物であ

杉原 忠直伝説考

るか。先ず年齢から考えよう。「御家譜」「芦刈家記録」豊後国津守「国事叢記」の三書はそれぞれ小むくの年齢を次のごとく誌している。

書名	年号	松千代	熊千代	勘子	小むく	お糸
御家譜	慶安四	二二	二〇	一六	四八	四二
芦刈家記録	慶安四	二一	一九	一九	四七	四一
国事叢記	慶安三	二二	二〇	一六	四七	記入なし

「御家譜」と「芦刈家記録」は三子の出生年をそれぞれ寛永七年、九年、十三年としているから、「芦刈家記録」の年齢は一寸ずつ少く誤算しており、「御家譜」が正しい。「国事叢記」では三子の出生年は誤つて寛永六年、七年、十二年となつて

いる。従つて三子の年齢は「御家譜」より一寸多くなつてゐるが、小むくの年齢は一致する。つまり小むくは忠直が死去した慶安三年には四七才であつた。忠直とは九才違ひである。これによつて逆算すれば、忠直が豊後国に配流された元和九年には芳紀二〇才である。年齢上に無理はない

三

実在人物小むくの出生は、上掲の浄土寺記録に「越前の国の人也」とあるだけで詳しいことはわからない。説話の上の一國女については三系統三様の出生を説いてい

る。第一系統の説話では、一國女は忠直の正室勝姫（高田様）の女中であつて、忠直が彼女に執心し、妾として差出すように命令しても、勝姫は承諾しないので、勝姫の家老高屋筑後をおどかし、一國女をひそかに連れ出した。これが勝姫と忠直の不和の重要原因となるのである。

「越陽秘録」
 抑此一國と云ふは更出生を知らずと云へども、無双の美女にてありしかば、忠直公限りなく思召して、則召て幸あるべしと度々仰けれども、高田様曾て御承引なく下略。

第二系統の説話は、一國女の出生を例の絵姿女房で説明し、彼女は美濃国関ヶ原の

問屋の女であると言つてゐる。

「忠直卿御乱行之事」

或夏の頃天守へ御上り御納涼し給ふ時、辻風吹廻し、絵一枚天守の窓より吹入たるを、忠直卿御覧するに、女姿絵なり。其容顔麗しく、加様の女もかなと心浮れたまいて中、濃州関ヶ原問屋の女に此絵図に毛頭恰好無違、容顔美麗成故、委細を語り、望に応じて鋪銀を遣し、彼の女を召抱ける。

第三系統では、一国女は下婢である。

「越藩史略」

一国女は何れの許の人なるを知らず、嘗て茶店の婢たり。公大坂より帰路、之を率ゐて還る。

「福井城の今昔」

忠直公江戸参勤交代の折節、垂井の宿本陣玉屋某方の下婢に契りて、遂に之を本国へ伴ひ、小山田多門の屋敷に囲ひて、度々駕を枉げられた。下婢之を一国女と称ふ。

これを要するに、実在の人物小むくの出生は越前の人であるという以上には一切不明なので、説話の方では自由に創作を加えているのである。

四

次に一国女の終末であるが、実在の小むくは上に引用した「御家譜」や浄土寺記録に明らかなごとく、忠直の死後は越後高田藩に引取られた。しかし物語の上では第一系統、第二系統ともに行方知れずになつてゐる。

「越陽秘録」

扱一国、多門、忠源房を尋られけるに、何地へ失けん、其行方なし。則国中に、御触有、見合次第召捕べき由なりしか共、更に居所は知れざりけりしとかや。誠に不思議の事共なり。

「忠直卿御乱行之事」

妾の一国並に小山田多門共に配所へ被召連たり。彼等が終を不知也。一国の塚は福井与力町一乗寺に有り。于今塚の中は蛇杯たへず候由。

ただ第四系統の一乗寺伝説だけが、一乗寺にある一国女の墓を説明するため、彼女の殺害を述べてゐる。

「越藩史略」

是日元和九年三月廿九日一国女道路に死す。中。今日未明轎中に刺し、之を一乗寺門前に

捨つ。故に此寺に葬り、理性院真如観月大姉と号す。何者の所為なることを知らず。

「続片響記」

此日元和九年三月廿九日忠直公之御愛妾一国女を何者か駕籠の内に殺し、金子を添て一乗寺の門前に捨置候。故当寺に葬と云へり。今に大きな石の祠あり。毎年大奥の方より弔有るといふ。法名は理性院真如観月大姉。

(筆者は福井大学教授)